「イサクの誕生」（創世記二一章一～二一節）

1　約束の成就

信仰の人アブラハムの人生は、創世記第一二章から辿ってきて、いまお読みした第二一章で、一つの頂点に達したとみてよいと思います。頂点とは、つまりイサクの誕生のことです。

アブラハムの人生の始まり、それは彼が七五歳のとき、神の召命の言葉に従って歩み出したときです。

神の目論見はアブラハムを「祝福の基」とすることです。祝福の基とするというのは、彼によって諸々の民を祝福にあずからせる、神の恵みが届くようにする、言い換えれば、世のすべて人々を救うということです。

そのために「選ばれ」（一八・一九）、神との特別の関係（契約）の中に置かれたのがアブラハムです。その関係は、一人アブラハムとのあいだでだけのことではありません。彼の子孫、彼から始まるイスラエルの民全体とも神は、そのような関係を維持することを約束します。そしてその関係を示す「しるし」が割礼でした。すでに見てきた通りです（一七・九以下）。

しかしアブラハムがそうした神の祝福の基となるということは、その前にアブラハム自身が、神の祝福にあずかるということがなければならない。祝福にあずかるために彼は神の命令に従い、「生まれ故郷、父の家を離れて」（一二・一）、カナンへさすらいの旅に出たのです。

カナン、のちにパレスチナと呼ばれる地域です。しかしそこではアブラハムはもちろんよそ者、見知らぬ人です。何のつてもない寄留の民です。それゆえ、そこで神の祝福にあずかるということは、彼にとって、何よりも、その地を自分のものとして所有するということでなければならなかったのです。

それだけでなく祝福にあずかるということは、自分の所有となった土地が子孫に受け継がれていくことも含まれます（一五・八）。ですから神の祝福の中核に、アブラハムに子供が生まれることがなければなりません。

しかし聖書は、アブラハム物語のはじめからアブラハムの妻サラが不妊であったことを明らかにしています（一一・三〇）。にもかかわらず神は二人に子供が生まれることを約束します。この神の約束と人間の不可能な現実、アブラハムの人生はこの二つの事実のあいだで営まれることになります。

こうしたことを少し整理して言えば、こうです。祝福という神の約束の中に、第一に土地が与えられることが、第二に子供が与えられることが、そして第三に、じっさいにアブラハムが諸々の民に祝福をもたらすことが含まれると。

これら三つのうちで、もっとも重要なのは二番目、すなわち、子供が与えられることにあることは言うまでもありません。それなしには祝福の第一の（土地所有）ことも、第三の（諸国民に祝福をもたらす）ことも意味をなさないからです。

それゆえ今日の箇所、すなわち、イサクの誕生をもってアブラハムの人生が一つの頂点を迎えたというのは決して過言ではないのです。イサクの誕生が神の信実、神の約束の成就だったことを、最初の数節がこう述べています。

主は、約束されたとおりサラを顧み、さきに語られたとおりサラのために行われたので、彼女は身ごもり、年老いたアブラハムとの間に男の子を産んだ。それは、神が約束されていた時期であった。アブラハムは、サラが産んだ自分の子をイサクと名付け、神が命じられたとおり、八日目に、息子イサクに割礼を施した（一～四節）。

アブラハムの人生の一つの頂点、イサクの誕生、それは彼自身の成功物語の一コマではありえません。むしろいま読んだ聖書の言葉は私どもに、彼の人生は神の恵みによったこと、徹底して神の約束の成就であったことを、そしてそれをアブラハムもよく知っていたことを語っています。

祝福に含まれる第一の意味、土地所有はまだ先のことになります（二三章）。第三の意味、諸々の民の祝福、それはすでに、少しずつ証しされていると言ってよいと思います。今日の箇所も第三の意味と関わります。というのは、後のアラブ人の祖先イシュマエルもアブラハムゆえに祝福の中にあることが証しされているからです。「大きな国民とする」というアブラハムに対して用いられた同じ言葉が、ここでも用いられています。

2　サラの笑い、ハガルの涙

イサクの誕生、それはアブラハムにとって、人生のさし当たっての頂点を示していると申しました。

そしてイサクという名前、笑う、詳しく言えば、彼は笑う、という意味の名前はアブラハムとサラ、それぞれ百歳と九〇歳の老夫婦を、明るく照らし出すものでもあったのです。

サラは言った。「神はわたしに笑いをお与えになった。聞く者は皆、わたしと笑い（イサク）を共にしてくれるでしょう」。サラはまた言った。「誰がアブラハムに言いえたでしょう、サラは子に乳を含ませるだろうと。しかしわたしは子を産みました、年老いた夫のために」。やがて、子供は育って乳離れした。アブラハムはイサクの乳離れの日に盛大な祝宴を開いた（六～八節）。

当時、乳離れは、早くて二歳、多くは三歳で、大きなお祝いの時でもあったようです。ここまでよく無事に育ってくれた、それは、どんなに感謝なこと、どんなに喜ばしいことであったでしょうか。

これら数節からして、この家は、イサクを中心に、どんなに明るく、笑いに満ちたものであったかと思います。まさにイサクは両親の愛情に育まれ、幸せな乳幼児時代を過ごしたようです。

族長たち、すなわち、アブラハム、イサク、ヤコブ、そしてヤコブの一二人の子供たちのことですが、この人たちの中でもっとも温厚な性格の持ち主はイサクだったとしばしば言われます。当たっているように思います。三歳までの時期が人間にとって大切な時であることは、ご存じの通りです。その間たっぷりの愛情を注がれてイサクはよく育った。この数年の期間は、アブラハムにとっても、その人生の中でもっとも

穏やかな時代だったように見えます。しかしこの幸福な日々も長くはつづかなかったようです。

というのも、いったんは収まったかに見えていた、アブラハム家の、いわば原罪ともいうべき、サラのかつて召し使いハガルと彼女の子供イシュマエルの存在が大きく思いものとなったからです。

かつて、ハガルがアブラハムの子を宿したことを知ったサラが、ハガルに辛く当たり、ハガルが家出し逃げ出したた事件を、私どもは知っています（一六章）。ここでもサラが発端です。

サラは、エジプトの女ハガルがアブラハムとのあいだに産んだ子が、イサクをからかっているのを見て、アブラハムに訴えた。「あの女とあの子を追い出してください。あの女の息子は、わたしの子イサクと同じ跡継ぎとなるべきではありません」。このことはアブラハムを非常に苦しめた。その子も自分の子であったからである（九～一一節）。

ハガルに対するサラの冷たい態度は、まずもって言葉遣いに表れています。憎々しげにサラはエジプトの女、あの女と言い、イシュマエルの名を口にせず、「あの女の息子」とくり返し呼んでいます。

「イサクをからかっている」のを見た、とあります。「からかっている」は一つの可能な訳です。元の言葉は「笑う」です。「遊んでいる」（口語）、「戯れている」（岩波）、「戯れ遊んでいる」（聖書協会共同訳）などの訳があります。一四歳年上の兄イシュマエルがイサクを遊んでやっていたのかも知れない。しかしサラには「からかっている」、いじめているようにしか見えなかったのです。

他方アブラハムにとってイシュマエルは、自分の子供であることは間違いありません。アブラハムとサラ、二人のあいだには、人間ではどうすることも思いの差が出ています。しかしここでは、イサクしか眼中にない、いわばエゴイズム丸出しのサラの思いが結果として神の思いに合致したのです。神はアブラハムにサラに全面的に従うように命じます（一二節）。

3　泣き声を聞かれる神

昨日までのアブラハムの非常な「苦しみ」はどこに行ったのでしょうか。いやそれはどこから来ていたか、と問うべきかも知れません。少なくてもそれは神の御心に相対しても苦しみでなかったようです。イサクに執着するサラを、もし彼女のエゴイズムと言うなら、二人の子供への愛情に引きずられているアブラハムの苦しみもエゴイズム、遡れば、彼の罪に由来しているのです。

そうした苦しみからアブラハムを解放し、神の御心にそった決断へと導いたのはやはり神の言葉でした。

神はアブラハムに言われた。「あの子供とあの女のことで苦しまなくてもよい。すべてサラが言うことに聞き従いなさい。あなたの子孫はイサクによって伝えられる。しかし、あの女の息子も一つの国民の父とする。彼もあなたの子であるか

らだ」（一二～一三節）。

この言葉を聞いたとき、アブラハムにはもはや迷いはありませんでした。ここでのアブラハムに、神の命令にドライなまできっぱり従って行く彼の信仰を、委ねて従っていく信仰を改めて垣間見る思いがいたします。

アブラハムは、次の朝早く起き、パンと水の革袋を取ってハガルに与え、背中に負わせて子供を連れ去らせた（一四節）。

アブラハムの決断は、すでに昨日の夜、下されています。それは実行に移されるだけです。

この記述で「背中に負わせて子供を連れ去らせた」という部分が、少し分かりにくいところです。というのも、この時イシュマエルは、すでに一四歳ぐらいになっているからです。この後の記述も、背中におぶることのできるほどの年齢の子を念頭においた書き方になっています。

アブラハムのもとを立ち去り、ベエル・シェバの荒れ野をさまようハガルとその子イシュマエル、その記述は、その内容と共に、多くの文学者の再話を促した、すぐれた物語になっています。今日は、それを辿ることはできません。彼らと神の関わりだけ取り上げておきます。

ハガルに置き去りにされたイシュマエル、彼は遠くに母の顔を見ながら、声を上げて泣きます。その声は神に届くのです。

神は子供の泣き声を聞かれ、天から神の御使いがハガルに呼びかけて言った。「ハガルよ、どうしたのか。恐れることはない。神はあそこにいる子供の泣き声を聞かれた。立って行って、あの子を抱き上げ、お前の腕でしっかり抱きしめてやりなさい。わたしは、必ずあの子を大きな国民とする」（一七～一八節）。

イシュマエルはアラブ人の祖先です（二五・一二以下）。そしてその名前の意味は神は聞かれる、です。神はイシュマエルの泣き声を聞かれます。彼の苦しみ、悲しみに目を向けてくださいます。なぜなら彼もアブラハムの子としてアブラハムの祝福のうちにあるからです。

アブラハムの生涯をたどるとき、私どもの目は、その子イサク、そしてヤコブと神の約束の担い手に目が向きます。選びの線に入らなかった人たちへの視線を忘れがちになります。

しかし聖書は違います。約束の子らにだけ関心をもっているのではありません。イシュマエルにも目を注ぎます。この神の祝福の広がりに、私ども教会も、神の民イスラエルと共に目を注ぐべきです。神は世を愛しておられます。それゆえ教会も世のためにあります。教会の務めは、神の祝福、慈しみ、福音を、相応しい広がりの中で証しすることです。ハガルとイシュマエルの定めと行く末を通して、神の恵みの広さを改めて確信する教会でありたいのです。

（二〇二〇・一〇・四）